



山田 勇；赤嶺 淳；平田昌弘（編）。『生態資源——モノ・場・ヒトを生かす世界』昭
和堂，2018，vi+277p.+x.

編者のひとり赤嶺淳の「大切なのは、ナマコ類資源の存続なのではなく、『ナマコを利用する』文化の持続可能性だ」（p. 49）という文章が本書の特徴をよく示している。「ナマコ狂い」のひとりと自称する赤嶺が記したこの文章に倣えば、「大切なのは、生態資源そのものの存続だけではなく、それを利用する文化と社会の持続可能性だ」が、本書を一貫するテーマということになるのか。

各執筆者が取りあげた「生態資源」としての「モノ」や、それを資源化していく「ヒト」と「場」（社会）は多岐にわたるが、資源のもつ象徴系としての領域〔内堀 2007〕を含めて、「生態資源」を通じて現代「世界」を考えようとするところに本書のねらいと特色とがあるようである。紹介される事例は、いずれも各執筆者が長年にわたるフィールドワークで取り組んできた「生態資源」である。それが「海」「森」「里」の3つの「場」（生態環境）に括って提示されている。

まずは、その括りで提示された本書の構成と内容を紹介しておこう。本書全体の構想と展望を述べる編者のひとり山田勇による序章「生態資源を考える」に続いて、第1部「海 アジア海域世界のヒトと資源のネットワーク」所収の2章、第2部「森 熱帯雨林の攪乱と資源をとりまくヒトと制度」の3章、第3部「里 グローバル化と地域文化の継承」の3章、そして終章となる第4部「生態資源の未来」の1章で本書が構成される。

第1部では、東南アジア海域世界での長年のフィールドワークから生まれた2つの論考が収録されている。赤嶺による第1章「『ナマコの知』をもとめて」は、ナマコの高産物としての利用の歴史を概観したあと、主要な消費地である東アジアのナマコをめぐる食文化と近年における日本の生産動向、日本各地に残るナマコ生産に関する「在地の知」が紹介され、「ナマコ文化」ともいうべ

き総体を支える仕組みを維持する必要性が強調される。

長津一史による第2章「ひと・海・資源のダイナミクス」では、ナマコだけでなくその他の海産物の採取者・生産者でもある東南アジア海域世界の海の民バジャウ人の漁撈・商業活動が詳しく紹介される。グローバルな資源管理の枠組みのもとで、ローカルな、あるいは在地の資源取引ネットワークが果たす役割に注目しようとするところに特色がある。

第2部の「森」は、非木材林産物でありかつ希少資源でもある沈香の取引ネットワークとその採取・植林・取引に関わる人々を綴った山田による第3章「沈香の森をめぐる人びと」と、森林とその主要な生産物である木材をめぐる制度とポリティクスを扱った2つの章、すなわち内藤大輔による第4章「持続可能な木材調達をめぐるポリティクス」および鈴木伸二による第5章「森林消失の比較政治学」からなっている。

第3章は、東カリマンタンの2007年の状況を軸に、紀行文といってよい体裁を装っているが、沈香の採取・取引・人工植林・広域取引をめぐるおこなわれた著者のライフワークとも言える調査への思い入れが存分に綴られて、興味深い。

第4章では、持続可能な木材資源利用に向けた国際・国内レベルでの森林認証制度設立の経緯と制度の仕組みを概説したあと、マレーシアでの制度適用の現状が描かれる。そして、東京オリンピックで利用される競技施設の建設に利用する木材をめぐる認証制度への国民的なりテラシーが高まることへの期待が語られる。ともすれば、熱帯材の持続的調達に重点が置かれてきたこの制度について、日本の林業、木材利用も無関係ではいられないことを指摘する点が重要である。

熱帯林の違法伐採に軍や政治家が関わっていることは広く知られているが、第5章は、そのエビデンスを丹念にたどったカンボジア、ミャンマー、インドネシアでの調査の結果を報告する。カンボジアでは、「家産制的」ネットワークのもとで森林資源が特定政治家集団により占有され、ミャンマーでは少数民族勢力とのパワーゲームのなかで「権謀術数的」な軍による森林利権の巧みな政治的

利用が行われ、そして、インドネシアでは、地方分権化にともなう「分散的」なパトロン・クライアント関係によって違法伐採が加速したことが紹介される。

第3部の「里」が扱う地域と資源は多様である。落合雪野による第6章「植物と体験の資源化」が東南アジアの人里植物であるジュズダマ属の植物を、平田昌弘の第7章「牧畜民にとっての生態資源とその変貌」がブルガリアの乳加工技術と文化の変遷を、そして市川昌広・松本美香による第8章「山村を未来へ継ぐ」が高知県大豊町を舞台に日本の山村の暮らしの現状を描いている。人がおもに居住するところが「里」である以上、「海」や「森」とは違い、当然ながらその「生態資源」をめぐる切り口も多様にならざるをえない。そして、社会の変化がそれぞれの「生態資源」に大きく影を落とすことになる。

第6章では、衣服の装飾に伝統的に使われていたジュズダマが、さまざまな過去の「ものがたり」をまとめて「自然素材」「手作り」などのキーワードとともに新たな「生態資源」として登場している例が、スラウェシ、ミンダナオ、台湾を舞台に紹介される。

第7章では、ユーラシアの「乳加工技術の縮図」(p. 224)とも言えるブルガリアの乳加工技術が、社会主義集団化、ベレストロイカ、EU加盟などの政治・社会的変化のなかで、技術存続の危機にあることが紹介されたうえで、技術継承のために「ブルガリア独自の基準」と原産地・品質等の認証制度の確立が必要なることを訴える。

第8章は、先行する2つの章とはいささか趣を異にする。ここでは、モノとしての生態資源は登場せず、里の生態資源を育ててきた一山村の人と社会の存続そのものが議論される。進行する過疎・高齢化のなかで未来を拓く「仕掛け」や「リーダー」を持続的に確保する途を模索する様子が、大学と地域との交流プロジェクトに関わる大学人の目線で描かれる。在来の生産物であるにせよ、新たな「村おこし」のための生産物であるにせよ、大豊町で生産される何らかの「モノ」(本書のテーマである生態資源)が仮にあったとしてもこの町の活性化にすぐさま効果を発揮するほど事態が単

純ではない状況が日本の山村に出来していることが語られる。日本の農山漁村において、生態資源を語ることの難しさをこの章は象徴的に示していると言えるかもしれない。

阿部健一による第9章「ヴァナキュラーな地球環境問題」からなる第4部「生態資源の未来」が本書を締めくくることになる。最終章には「生態資源」という言葉は現れず、議論されるのは「環境問題」あるいは「地球環境問題」のパースペクションに関わるこの20年間の変遷である。そして、この20年のあいだに、地球環境問題への対処の仕方が国際的な国家間取り決めから一人ひとりの人間がこれから何をすべきかを考えなければならないヴァナキュラーな取り組みの段階へと移ってきたことが強調される。経済への偏重を超えて「人と自然の関係性を問い直すことが地球環境問題の根源である」とする最終章の結論が、「大切なのは、生態資源そのものの存続だけではなく、それを利用する文化と社会の持続可能性だ」という本書を一貫するテーマとも共鳴している。

本書の紹介が長くなったが、各執筆者がそれぞれの長年のフィールドワークにもとづいて記述しているだけに各章はそれぞれ読みごたえがあり、その主張するところにも共感を覚えた。ただ、3人の編者がなぜ全体のまとめとなるような議論を展開してくれなかったのかという多少の不満を読後感としてもっている。各編者が第1部から第3部の各部の編集を担当したものと推測できるが、それぞれの担当を踏まえたうえでのより総合的な議論を展開してほしかった。生態資源の特徴やその管理をめぐる課題は海、森、里という「生態環境」によって違った側面があるのか、また共通する面があるのかといった議論が3人の編者の鼎談としても聞きたかったところである。第4部の「生態資源の未来」が内容としては「地球環境問題の未来」にすり替わってしまっただけに、最終章の阿部論文に続いて、それを踏まえた「生態資源の未来」を論ずる鼎談があればさらに明解な主張のある一書としてまとまったのに、と思うと残念である。

あと一つ気にかかっている点がある。それは、第3部の「里」を読みながら、「生態資源」として

括られるものにはいったいどんな「モノ」が含まれるのかという点である。言い換えれば、この言葉と親和性のある資源とそうでない資源があるようにも感じられたと言ってよいかもしれない。より端的に言えば、第3部で対象となった事物、すなわち「ジュズダマ」「乳加工品」「山村と住民」をこのように並べてみると、事物と人とのあいだにはその関りかたにおいて「精粗」「濃淡」があって、その関わり方が「粗」「淡」であればあるほど「生態資源」として認知しやすいというような傾向が、この言葉には含まれていないかという疑問である。人里という人が作った環境に育つジュズダマと、人によって養育される家畜がともに「生態資源」として括れるのかどうか。これがイネやムギのような世界各地で栽培される作物であっても「生態資源」として括れるのかどうか。こういった点も、ぜひ議論してほしかったところである。

本書が定義している「生態資源」(p.6)が包含している領野は非常に広く、農業や畜産業、そして人々の生活空間も「生態資源」に包摂されているので、第3部で扱った「ジュズダマ」「乳加工品」「山村と住民」も当然ながら「生態資源」として括ることができるものの、それをより具体的にどのような事物として措置していくのが、今後、「生態資源の未来」を論ずるうえで重要な論点になるはずである。幸い本書の著者たちは、長年にわたって科学研究費等による共同調査を実施してきたので、今後も同様なアプローチでここで取り上げた「生態資源」に関する調査を継続されるに違いない。そのときには、これらを「生態資源」として括ることから見えてくる「世界」がより鮮やかに描かれるものと期待している。

(田中耕司・京都大学名誉教授)

参考文献

内堀基光(編). 2007. 『資源と人間(資源人類学01)』. 東京: 弘文堂.

大野昭彦. 『市場を織る——商人と契約：ラオスの農村手織物業』 京都大学学術出版会, 2017, iii+562p.

本書は、開発経済学者として知られる大野昭彦氏が、20年におよぶラオス手織物業の観察を通じて、市場形成の過程を実証的に論じた研究である。550頁余におよぶ大著であるが、序章および第I部で示された議論の枠組みによって、浩瀚な個別事例からもたらされる情報が「演繹的」(p.25)に整理・説明されていくため、著者の主張は読者に明瞭に伝わってくる。

序章によれば、本書のベースとなっているのは、情報が不完全で、取引費用が存在する現実の社会において、どのような商人がいかなる作法＝契約で市場を形成していくか、という問いである。取引を安定的に実現させる市場統治メカニズムとして、これまでも近代法によるフォーマルな統治の形成や、共同体(コミュニティ)ないしはギルド・株仲間による集団的なインフォーマルな統治が、開発経済学や新制度学派の歴史学の中で議論されてきた。しかし著者は、ラオス手織物業での市場取引において、これらの市場統治のメカニズムはほとんど機能していないとする。それにもかかわらず、1980年代の自由化以降、ラオスでは「織物ルネサンス」ともよばれる手織物業の興隆が見られるのはなぜか。手織物の取引は、「お得意様関係」として知られる相対取引の中で行われている。著者はここに、契約当事者間によって創出・工夫される「個人的統治」のメカニズムを見出した。その中核は反復取引であり、それが当事者双方に協調行動——契約の維持・裏切りの抑制——を促すことで、安定的な市場取引を成り立たせる(その理論的根拠は、無限回の反復囚人のジレンマ・ゲームでは協力がナッシュ均衡として成立するとするフォーク定理)。これに、契約上の軋轢を回避する事前の措置として「適切な契約形態の選択」と「贈与交換」、事後の措置としての「契約条項の状況依存的な変更」がサブ・システムとして加わることで、「自生的秩序」としての個人的統治が機能することになったとされる。

第I部は、この個人的統治による市場形成の観